Joint Education Program（JEP）実績報告書「ウズベキスタン・スタディツアー」

所属　大学院総合国際学研究院
名前　木村 暁

・授業題目名：　ウズベキスタン・スタディツアー
・授業形態：　対面
・開催場所：　ウズベキスタン共和国（タシュケント市、サマルカンド市、ブハラ市）
・期間：　2024 年 3 月 11 日～2024 年 3 月 21 日
・参加者数：　学生 15 名、引率教員 2 名（島田志津夫、木村暁）

1. 授業の概要／Overview of the course

本学において 2 日間の事前学習を集中講義としておこなったうえで、3 月 11 日～20 日のウズベキスタン現地滞在では、協定校であるタシュケント国立東洋学大学との学生交流とフィールドワーク、協力校であるサマルカンド経済サービス大学およびサマルカンド国立外国語大学との学生交流とフィールドワーク、ブハラ市の歴史地区の見学、タシュケント市の日本人抑留者資料館と日本人墓地の見学などを実施。

2. 実施報告（日程、実施内容、開催時の写真）／Activity report（schedule, content, photos）
※写真はできる限り付けてください。 If possible, please give us many photos.

スタディツアーには東京外国語大学の 15 名の学生が参加し、2 名の教員（島田志津夫、木村暁）が引率した。参加学生の専攻別内訳は、中央アジア専攻 8 名、ロシア専攻 2 名、モンゴル専攻 2 名、ペルシア専攻 2 名、国際日本学部 1 名、学年別内訳は 1 年生 10 名、2 年生 2 名、3 年生 2 名、4 年生 1 名であった。

まず、スタディツアー本番に先立って、2 日間の事前学習を集中講義としておこなった。2 月 2 日（金）の第 1 回事前学習では、担当教員からスタディツアーとウズベキスタンの概要を説明したうえで、グループ分け（5 グループ）と、話し合いのうえでグループごとのテーマ設定をおこなった。次いで、担当教員による初級ウズベク語の講義、サマルカンドとブハラの歴史の講義、ウズベキスタンに関する動画の視聴をおこなった。第 2 回事前学習に向けて、各グループはテーマと作業計画にしたがって文献やその他情報の収集・調査にあたった。3 月 7 日（木）の第 2 回事前学習では、5 つのグループそれぞれが事前の調査内容のプレゼンテーションをおこない、各グループがプレゼン後の質疑やコメントを通じて不足点や疑問点を確認し、これをふまえて現地調査にあたることとした。

3 月 11 日晩に空路でタシュケントに到着。3 月 12 日午前、協定校であるタシュケント国立東洋学大学を訪れ、教員・学生間で顔合わせをしたのち、学生交流行事の開会式を催し、グループワークを始動させた。東京外国語大学側の 5 グループ（それぞれ 3 名で構成）に東洋学大学側からも 3 名ずつが加わり、6 人構成の各グループがそれぞれのテーマにしたがって具体的な行動計画を策定した。

タシュケント国立東洋学大学で゛の学生交流

同日午後からグループごとに分かれ、13 日～14 日にわたってタシュケント市内の各所で本格的なフィールドワークを実施した。15 日午前に各グループでプレゼンテーションに向けて調査結果を総合する作業がおこなわれた。同日午後のプレゼンテーションでは、各グループが日本語教育、歴史・現代建築、タシュケントのマハッラ、経済事情、言語状況についてフィールド調査の成果報告をおこなった。

16 日は午前中にタシュケントからサマルカンドに鉄道で移動し、協力校であるサマルカンド経済サービス大学において学生交流行事を実施した。これにはサマルカンド国立外国語大学の日本語を専攻する学生たちも参加した。東京外国語大学側から 2 名の学生が日本の折り紙と食文化を紹介するプレゼンテーションを英語でおこない、サマルカンド側からも 3 名の学生が先方大学やウズベキスタン、サマルカンドを紹介するプレゼンテーションをおこなった。その後、双方の参加学生全員が混ざり合って自己紹介や意見交換をおこなった。

サマルカンド゛経済サービ゛ス大学で゛の学生交流

午後にはサマルカンド側のガイドや学生たちの案内のもと、アミール・ティムール（1336–1405）の葬られるグーリ・アミール廟、3 つのマドラサの鼎立するレギスタン広場、ティムールの母后を記念したビービー・ハヌム・モスクなどを見学した。

17 日は午前から昼過ぎにかけて、15 世紀当時に世界最高水準の天文観測のおこなわれたウルグベク天文台、有名なソグド人壁画を保存するアフラースィヤーブ博物館とチンギス・ハン（1227 没）の破壊を受けたサマルカンド旧城址（アフラースィヤーブの丘）、ウズベキスタン共和国初代大統領イスラーム・カリーモフ（1938–2016）の霊廟、ティムール朝女系王族の葬られるシャーヒ・ズィンダ墓廟群などを見学した。その後、サマルカンド市内のある民家を訪問し、春分祭を祝っておこなわれる定例の食事や遊戯に親しむ機会を得た。学生たちはアシュ（ピラフ）の調理法を見学するとともに、小麦の麦芽を煮詰める季節料理スマラクや、パイ生地に肉を包んでオーブンで焼き上げるサムサの調理実習に取り組んだ。

18 日は午前に鉄道でサマルカンドからブハラに移動した。午後はガイドの案内にしたがってブハラ旧市街のラビ・ハウズ建築複合体、シナゴーグ、16 世紀後半の円蓋付き交差式商業施設（タ－ク）、いくつかのマドラサ、モスク、ミナレットを見学した。19 日は午前からサーマーン朝王家廟、バーラー・ハウズ・モスク、ブハラ・アミールの宮城跡にあたるアルク博物館、おなじくその離宮跡にあたる月星宮殿などを見学した。その後、鉄道でブハラからタシュケントに移動した。

現地での最終日にあたる 20 日は、午前中を自由行動と荷造りの時間にあて、午後は第二次大戦後のいわゆるシベリア抑留を受け、ウズベキスタンに移送されて強制労働に従事さ

せられた日本兵の社会貢献を記念して建てられた資料館、ならびに、その付近に位置する日本人墓地を見学した。以上をもって予定していたスタディツアーの全日程を終了した。

アフラースィヤーブ゛の丘（サマルカンド゛）

日本人墓地（タシュケント）

両替商のターク（ブ゛ハラ）

3. 授業のレビュー（成果や課題、今後の展望など）／Review of the course （such as achievements, challenges and prospect for the next term/year）

本学の参加学生にとって、タシュケント国立東洋学大学日本学部の学生たちとのグループワークは、このスタディツアーにおける最重要の取り組みの一つであった。各グループはテーマにしたがってタシュケント市内で観察やインタビューなどをおこない、限られた時間のなかでそれぞれに実地調査を進めた。なかにはテーマを若干変更するグループもあり、たとえば、当初タシュケントの新市街と旧市街の成り立ちについて調査しようとしていたグループは、調査目的の実現可能性にかんがみてマハッラ（街区あるいは末端行政単位）の役割にテーマをしぼり、調査結果を効果的にまとめるとともに発表を成功裡になしとげた。経済事情を調査したグループは、当事者の心性・心情と現実経済との関係性を推しはかりながら、焦点をバザールにあてつつインタビュー項目を手際よくしぼり、近年の経済動向に関する鋭い分析をおこなった。一方で、グループによっては役割分担や相互連携がかならずしもうまくいかなかったり、十二分に調査や分析を尽くせなかったりするケースもみられた。その点で、今回の参加者の構成は学年や専攻にややばらつきがあり、メンバー構成の事情か

ら協力関係にむずかしさが出たグループもあったといえる。

最終日のプレゼンテーションからは、日本側とウズベキスタン側の学生が一体となっておこなったグループワークが、それぞれに特徴ある成果を上げたことを確認できた。本学の参加学生は帰国後にレポートを作成・提出し、成果と課題を総括することになる。次年度に向けては、事前学習からスタディツアー本番までの期間に日本側とウズベキスタン側双方の学生がオンラインでグループワークの下準備を進めておくことなどが、とりうる改善策の一つとして考えられる。学生間のコミュニケーションはおもに日本語でなされ、一部では英語やロシア語、ごく部分的にはウズベク語も使われていた。本学の参加者のなかには、これを機にウズベク語やロシア語への学習意欲を一段と高めた学生も少なくない。総じて、今回のスタディツアーは参加学生がウズベキスタンの国家、社会、文化、人々への理解を深めると同時に、現地学生と友好と協力関係を育むまたとない機会となった。それぞれの学生がそれぞれの課題を発見できたはずであり、この経験を今後の学習・研究につなげてくれることが期待される。きわめて有意義な機会であり、次年度以降も催行の継続が強く望まれる。